

第四節 古墳時代

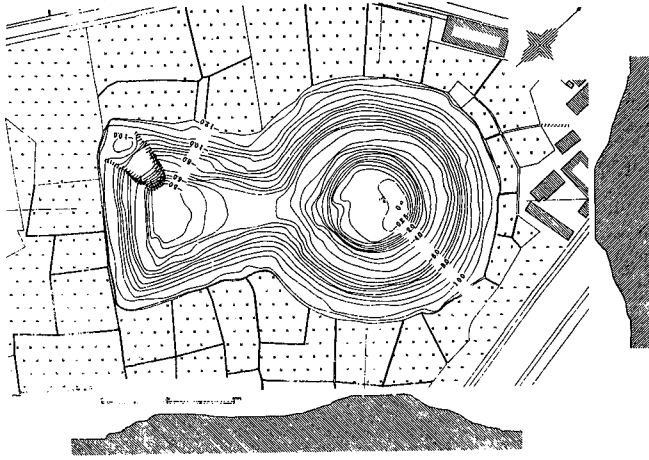
11	余野銅鐸	小型銅鐸	五・六	丹羽郡大口町余野神明下	宮川芳照	昭和五十一年
10	伝春日井郡銅鐸					
9	鳴海海底銅鐸	突線鈕式近畿式		名古屋市緑区鳴海付近		
8	丸根銅鐸	突線鈕三式六区袈裟櫛文三遠式	八五	名古屋市瑞穂区丸根町	辰馬悦蔵	明治三年
7	名古屋城濠銅鐸	突線鐸式近畿式	一〇六	名古屋市名古屋城濠		
6	伝愛知郡銅鐸	扁平鈕式全面一区流水文		愛知郡		
5	神領二号銅鐸	突線鈕三式六区袈裟櫛文三遠式		春日井市神領町屋敷田		

(三河部では二十四個出土している)

尾張の古墳

古墳時代前期の古墳は数が少なくまた、古い時期のものは平野を見下すような丘陵の縁辺や台地の端な  
 ートルから二百数十メートルに及ぶ古墳を造営している。遺体を埋めるために小さい割石を小口積みにして四方を囲  
 い、石室を設けている。その中には割竹形の長大な木棺や箱形棺をおき遺体を入れて、棺の内外に多くの銅鏡や玉類、  
 剣などを副葬しているが、この副葬品は宝器や呪術的な性格をもったものである。

愛知県下におけるこのような前期の古墳は、四世紀後半ごろに造営されたと考えられる犬山市白山平山の頂上にあ



(「重要遺跡指定促進調査報告」より)

図2-29 青塚古墳実測図

る東之宮古墳である。成田山名古屋別院の裏山にあたり、全長約七十八メートル、主軸を東西にとった前方後方墳である。この古墳の竪穴式石室からは銅鏡十一面、合子、釧、鍬形石、車輪石、勾玉、管玉、剣、刀、槍、斧、針、鏃などの豊富な副葬品を出土した。中でも銅鏡は中国からの舶載とみられる三角縁神獸鏡五面と、日本で製作された仿製鏡六面がある。舶載鏡の天王日月唐草文帝二神二獸鏡は、七面の同じ型から作られた同範鏡が知られていたが、東之宮古墳の出土例によって八面となり、日本の主要な古墳とのつながりが明らかにされ、その地位の高さをうかがわせる。また、日本では新発見の吾作銘重列二神二獸鏡がある。碧玉製の鍬形石もその分布が美濃から加賀に至る範囲であったものが、尾張まで広げられたなど古墳のもつ意義は大きい。本町の東辺にある青塚古墳と同じくこのような古墳の主は、尾張平野北部の開発の要となる地位と考えられ、当時の支配者瀬波眞主（にばのみま）に関係ある古墳で、尾北の一大勢力としながらも大和朝廷下の一地方の首長としての地位を確保していたものであろう。

このほか、大和朝廷によって地方の首長の地位とのかかわりをもつといわれた三角縁神獸鏡を出土した古墳は、海部郡佐織町千引の奥津神社から出土したとみられる三面、小牧市甲屋敷古墳一面、名古屋市向山藪古墳から一面、彷彿三角縁神獸鏡を出土した小牧市天王山古墳、宇都宮古墳、小木古墳、西春日井郡仙人塚、春日井市出川大塚、東海市兜山古墳などがあり、それぞれの地域に支配権を確立した勢力が存在していたことを、これらの鏡から知ることができる。古墳文化は大和政権とかわりあいをもちながら発展していったと考えられるため、これらの前期古墳の様相が相互に類似した内容をもっていることがわかる。また、前期古墳の文化は、その分布と内容からみると、畿内、伊勢、美濃、尾張、三河へと波及していったことが明らかとなり、尾張の古墳は、畿内よりややおかれていることが考えられる。

中期古墳の時代になると、大型の前方後円墳や前方後方墳は丘陵や台地縁辺から漸次平地へと移り造営されるようになる。平地では古墳の外周に周濠をめぐらしたり、壮大な墳丘上に葺石や円筒埴輪をたてたりして、支配権力の強さや古墳の壮嚴化をはかっていたりしている。また、墳丘の裾には土師器や須恵器の供献がみられるようになる。

内部構造は舟形石棺や長持形石棺、本棺や石棺の直葬などの葬法がみられ、副葬品には銅鏡、滑石製品、鉄鏃、須恵器、武器、農具、工具など、前期古墳にみられるような宝器的、呪術的な副葬品が少なくなっている。

尾張の中期古墳は、尾張北部の犬山市青塚古墳、守山方面では白山古墳、池下古墳、長根古墳、春日井市では、春日山古墳、白山古墳、味美二子山古墳、江南市曾本の二子山古墳などの大型古墳がみられ、それぞれ古墳時代中期の典型的な前方後円墳が築かれている。これらの地域には、一大勢力をもった政治的集団が存在し、それぞれの首長が支配権を行使して、地域の住民を包括し、地方政治の形成と統治をしていたといえよう。これらの首長は鉄製の武器

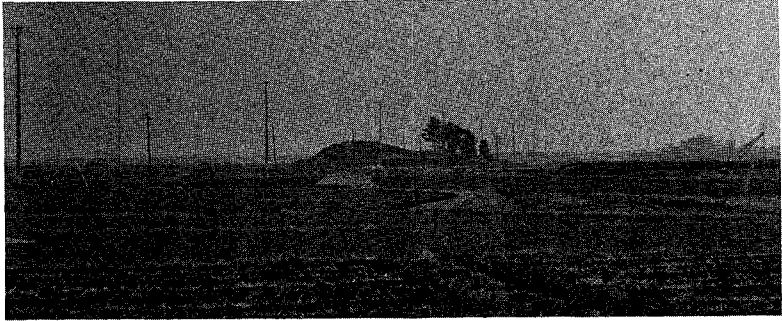


図2-30 曾本の二子山古墳

や農具、工具などの生産や流通までを独占し、大きな軍事力や経済力を得、また地域開発の長として活躍したと考えられる。

後期古墳のころの六世紀代になると、古墳は爆発的に増加してくる。これは古墳が王墓的な性格を失い、死者を葬るための家族墓的な様相を呈してくるためと大陸の葬法である横穴式石室が日本に取り入れられ、一般化してきたことなどが原因として考えられる。また、大豪族の支配下にあつた階層が力を得てきたとも考えられる。生産性の向上にともない余剰生産物の蓄積が貧富の差や階層差をいっそう大きくし、生産の社会的分業が発展されるなどの条件も時代とともに向上した結果であろう。

このような社会的な背景をもって造られた古墳は、大型のものが徐々に姿を消し、小規模となつてほとんどが円墳となり、横穴式石室という内部構造を備えて刀、鉄鏃、刀子金環、土師器、須恵器、玉類など一般に普及している器物が副葬され特徴となつている。

尾張における後期古墳の分布は、木曾川中流域の犬山市上野古墳群、熊野神社古墳群下流地域の一宮市浅井古墳群、庄内川流域の勝川町、味美古墳郡、守山の志段味古墳群、矢田川流域の守山古墳群、名古屋市熱田古墳群などに集中し、そのほか各地に散在して尾張部に四百余りの古墳がみられる。

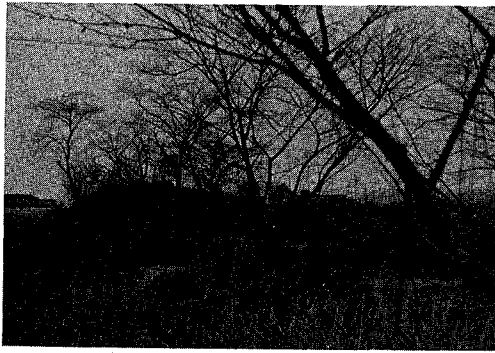


図2-31 桜塚古墳

これらは古墳はその立地している地域と密接な関係をもっているが、破壊したり消滅したりした数を推察すると相当の数になるであろう。

古墳の終末は、畿内においては七世紀の中葉ごろに終末期をむかえているが、尾張や三河知方では八世紀代に入ってから姿を消している。大化の薄葬令や仏教の伝播が畿内よりもおかれて普及したためであろう。

秋田地区の古墳

#### 桜塚古墳

大屋敷字新田にある長松寺の南方約二百メートルにあつて、平坦な畑の西端に立地している。畑の西側は、幅のせまい帯状の水田となり、その中央を五条川が南流している。古墳は、直径約十四メートル、高さ約二・六メートルの円墳である。この古墳は桜塚とよばれ、一本の桜の木に一重と八重の花が咲くという伝承があるが、現在は数本の成木がある。

昭和のはじめごろ、村の青年達によつて発掘されたが、川原石が積まれているだけで、遺物は発見できなかったと伝えられており、以後、何人も手をくだすことなく、長桜部落の管理によつて今日に至っている。

#### 道心塚古墳

秋田字長桜の南、巴製作所の南端にある。古墳の南約百五十メートルには、昭和三八年二月に発掘された北替地遺跡(縄文早期)があつて、その南は低湿な水田地帯が広がり、湧水の多い所である。

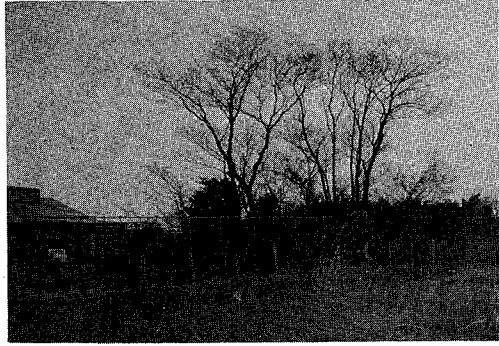


図2-32 道心塚古墳

古墳は、高さ二メートル、南北の径十二メートル、東西の径九メートルの墳丘を残している。墳丘の上に立つて強く踏むと、ドーンというにぶい反響があることから、石室の可能性が推察される。またいつの時から不明であるが、ひそかに墳丘上を掘ったところ、大石があり、その石を少し動かして中をみたところ、朱が塗ってあったため驚いて埋めもどしたという話も伝えられている。昭和三〇年頃には、大木が繁り、周辺は一面の桑畑となって、夕方はとくに薄気味の悪い所でもあった。また、古墳の木を切るとたたりがあると伝えられ、人に恐れられたためか、よく残されている。別名坊主山ともいう。

#### 仏鬼塚古墳

秋田字西薮山一八にあった円墳であるが、明治時代に道路工事によって土をとられて消滅し、現在は、径二十四メートルの円形の畑となっている。壊された時勾玉が出土したのみで、何も発見されず、また古墳となつては不明である。

墳に対する興味も薄かったので、土取りの時の状況は記憶がうすいと古老が伝えている。この古墳は、昔から金銀の鎖が埋められているとか、塚の付近に住んでいた老婆が死人の予言をするという伝説も伝わっていたが、古墳の消滅とともに、ほとんど知られなくなった。また仏鬼塚の西に二基あったが、墓となつて盛土をとられ石組みが残っているといわれながらも、その所在は不明である。

#### 大屋敷地区の古墳

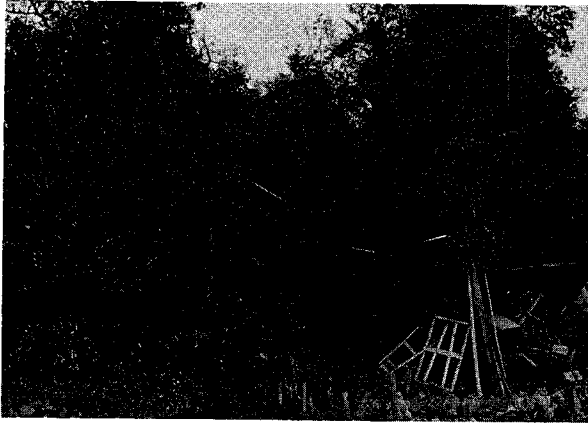


図2-33 大日塚古墳

### 大日塚古墳

大屋敷字新田の中央部を南流する五条川に架橋された長念橋の西方約五十メートルの竹藪の中にある。竹藪の西側は平坦な水田地帯となり、南北は住宅が並んでいる。

墳丘は、東西の径約二十三メートル、南北の径約二十六メートル、高さ三メートルの円墳で、墳丘の上部は削平され、丹羽氏の由緒を刻んだ等身大の石碑と祠が祭られている。墳頂の削平された部分以外は竹藪となっており、墳丘

の東裾は約六十七センチメートルの高さに切立っている。古墳の原形は、現状よりも規模が大きかったと考えられる。

長念橋の周辺は、土師器や須恵器が地下一メートル前後の深さに含まれており、新田地内では、古墳時代にすでに人々が住んだことが認められる。

### 山王道古墳

大口中学校の西方約二百メートルにあつて墳丘上に笹が密生した南北の径約十六メートル、東西の径約十九メートル、高さ二メートル余の墳丘をもっていたが、昭和四〇年代に破壊された。

墳丘は黒色有機土層で明らかに人工の盛土であることがうかがえる状態であった。周辺からは土師器や須恵器、山茶碗などの破片が多く採集され、北側の低い水田地帯を基盤とした生活址が存在していた。大口中学校所蔵の須恵器は、この付近出土のものである。



図2-34 いわき塚古墳(北西から)

### しようねん 塚古墳

大屋敷字向野にあつて、五条橋の東約八十四メートルの位置にある。東西の径約十五メートル、南北の径約十三メートル、高さ約二メートルの円墳である。東側の裾はよく原形を残していたが、現在は石垣が積まれて整備されている。かつては、南側の裾に、石室に使用されたと思われる大きな川原石が露出しており、横穴式石室の一部と推定される。墳頂には、大屋敷原新田、今の通称安藤屋敷といわれる区域の人々に関係があるとみられる石塔や宝篋印塔、五輪石などがある。

### 大塚古墳群

同興紡の正門前に架る橋の南側付近で、昭和の初めごろ秋田字伝右衛門新田の道路を新設する際の土取り場となつて消滅し、地籍図にその跡を残している。第一号墳は径約二十メートルでこの東側三十五メートルに径約十五メートルの第二号墳が、南三十四メートルに径約十メートルの第三号墳があつた。この三基は三角形にあつたが、破壊された折、土取りに従事した古老たちも石室や副葬品の有無についての記憶が薄く、古墳の内容を確実に伝える何ものも残されていない。ただ第一号墳の跡から円筒埴輪片が二点採集されているにすぎない。第三号墳の近くから、古墳時代の住居址が圃場整理の折発見されたが、調査されぬまま破壊されてしまった。

### 豊田地区の古墳



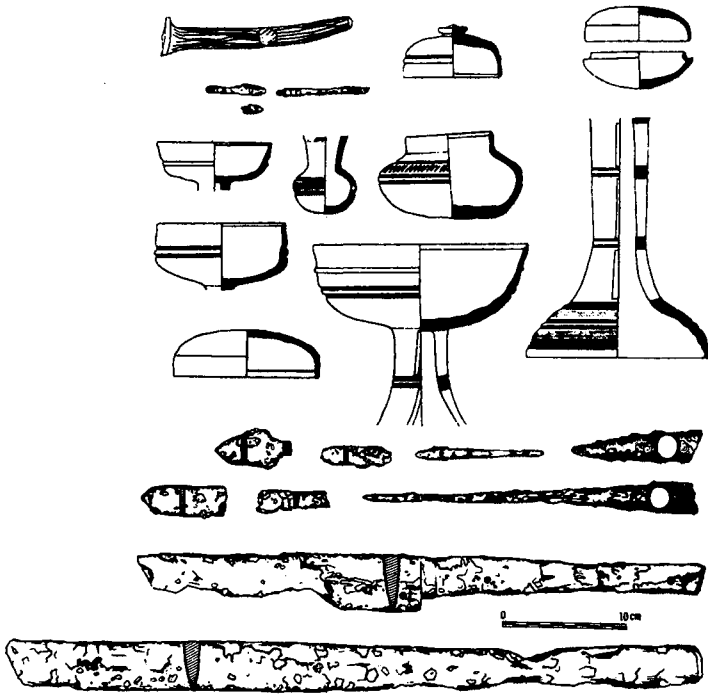


図2-35 いわき塚古墳出土の須恵器と鉄器

いわき塚  
古墳

昭和の初め頃、豊田字西成兼  
にあつた小山の盛土が取られ  
たとき、岩で築いた横穴式石

室が現われ、その中から須恵器、鉄器、銅  
鏡などが発見された。出土した須恵器は、  
有蓋卮と蓋杯、高杯などである。有蓋卮の  
蓋は、口径九・五センチメートル、器高五  
・二センチメートル、外側に二条の沈線を  
めぐらし、内側に段をもっている。卮は、  
口径八・四センチメートル、高さ八・五セ  
ンチメートル、内側に段をもち、肩から胴  
の上部にかけて一条の沈線、斜線列、二条  
の沈線を配し、形がややいびつである。高  
杯は脚部のみで脚身が長く、三段に透しを  
入れその間を二条の沈線で飾り、裾も沈線  
や斜線列で飾っている。また杯部が径二十  
一センチメートルで、外側の上部に一条の

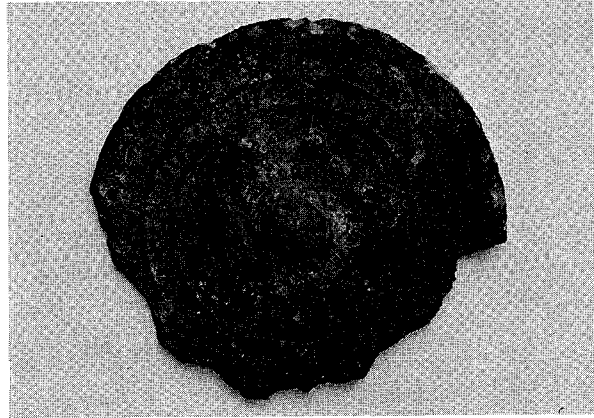


図2-36 いわき塚出土の乳文鏡

沈線、下部に二条の沈線を施し、内側に段がみられる。脚部は、二段の透しを入れ、その間を二条の沈線で飾っている。また杯部の径が十二センチメートルと十一・二センチメートルのものがみられる。

杯蓋は、口径十四・三センチメートル、器高四・七センチメートル、内側に沈線をもつもの、口径十・三センチメートル、器高三・四センチメートルのものなどがある。杯身は口径九・二センチメートル、器高二・七センチメートルで立ち上がりの低いものがある。その他把手付杯の把手が一点ある。

鉄器は直刀と鉄鏃、鉾、小刀子などがある。

直刀は、長さ一・〇メートル、うち刀身が七十八センチメートル、柄の長さ二十三センチメートル、幅は四・六センチメートル、刀背の厚さ一・三センチメートル、柄には直径四ミリメートルの穴がふたつあけられており、相当大身の直刀である。また長さ二十九センチメートル、直径二・五センチメートルの鉾がある。穂先の断面は正三角形で中実となり、基部は中空となっている。さらに長さ十一センチメートルの残欠一本と、鉄鏃七本小刀子一本がある。

銅鏡は、一部が破損している小型の彷彿鏡である。背文は、円座鈕を中心に九個の円乳を不規則に配しているが、その中三個は小さい乳座である。乳文帯の次に楡歯文帯、複線による波状文がみられるが、ここで欠落している。残



図2-37 東屋敷古墳の須恵器

っている部分の鏡径は六・八センチメートル、縁高二ミリメートル、面反り三ミリメートル、鈕径一・五センチメートル、鈕高五ミリメートルで、背面には緑青が美しくでている。

この古墳は、曾本の二子山、小折新田の神福神社古墳、小折の富士塚（石亀塚）などの前方後円墳と何らかのかかわりをもつ小豪族の墳墓と考えられる。古墳の内部構造や、副葬品の位置など不明な部分が多いが、副葬品から考察すると、尾張三河の須恵器型式の第三〜第四型式にあたり、何度かの追葬があったとみられる。

#### 東屋敷古墳

豊田字御供所、社本鐘夫氏の屋敷内にあった。昭和一三年ごろ、墳丘上にあつた竹藪を伐り払って土取りをしたところ、横穴式石室が現われたところである。現在は、石室の石を利用して築山がつくら

れ、その上に祠が建てられている。石室は、長径約三十センチメートル、短径二十センチメートル内外の楕円形をした扁平な川原石を用いて構築されていた。石室の大部分が、発見前に既に破壊されていたために、構造は不明であるが、遺存した石積み状況から推察すると、東に向って開口していたものと考えられる。土取りによって発見されたのは、奥壁の一部と思われ、北壁もわずかながら残っていた。出土した遺物は、奥壁と思われる石積み南端から北へ向って順に、提瓶、短頸甕、無蓋高杯、土師器と並んでいた。北壁の東端からは土師の甕と須恵器の蓋杯が出土した。

遺物の個々を見ると、無蓋高杯は、高さ十センチメートル、杯部の径十・四センチメートルで外側に二条の凹線がめぐらされている。脚部は飾りのない小

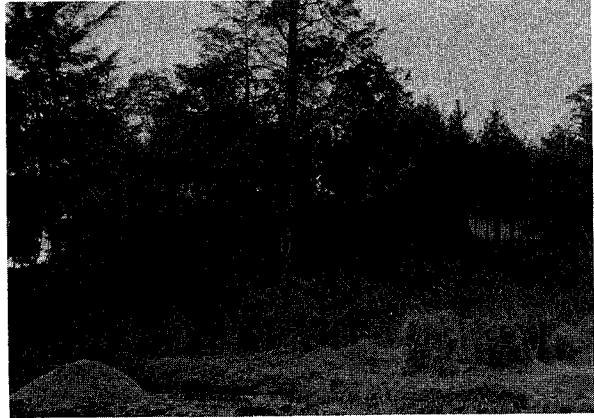


図2-38 神福神社古墳

型のものである。提瓶は、口縁を段で飾り、頸部が太い。胴部は片面が半球状にふくらみ、肩に耳のついていないもので、器高二十三・四センチメートル、胴部の径十八センチメートル、口径十一センチメートルを測る。短頸埴は器高十八・四センチメートル、口径十一・六センチメートル口頸部の立ちあがり三・九センチメートルのなだらかな肩部をもち斜めに浅い凹線が一条めぐらされ、胴部に整形痕と自然釉がみられる。これらは、須恵器の第三型式にあたるものである。

### 神福神社古墳

豊田字小折新田で古墳全体が神社の境内となっている。この古墳は、町内で唯一の前方後円墳である。前方部を西北に向けた全長約五十四メートル、後円部の径約三十一・

二メートル、前方部の長さ約二十三メートル、幅約三十メートル、括れ部の上面の幅九メートル、基底面で約十六メートル、前方部の高さ三メートルで後円部に近づくに従いやや低く傾斜している。後円部は、江戸時代にこわされたものらしく、南北に約十九メートル、東西に八メートルの幅で深さ約四メートル近くえぐられている。また後円部の西裾が五分の二程度削られており、前方部と後円部の括れ部に拝殿と本殿が建てられている。本殿の西側は、括れ部がよく遺存しており、陵線が前方部の西北偶まで続いている。前方部は割合い原形をとどめており上面が杉の植林で少し引きならされ、北端が伊勢湾台風の倒木によって壊れ、括れ部の南裾がやはりならされて平坦

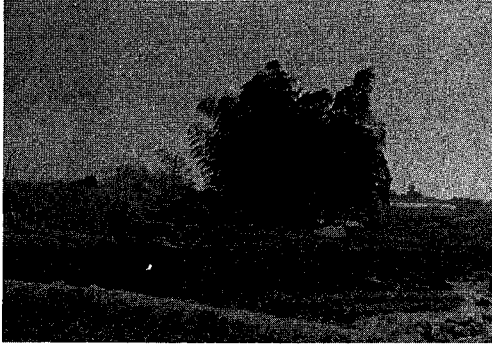


図2-39 白木古墳（竹藪の左側）

になつてゐる程度である。

この前方後円墳の西方二百九十メートルには、西成兼古墳があつたが現存せず、その西百六十メートルには白木古墳がある。南西の方向約六百五十メートルには、江南市曾本の前方後円墳である二子山古墳がある。ここは明治年間

に発掘され、金環、玉類、刀、くつわ、よろい、ほこ、かぶと、鏡、須恵器などの副葬品が出土した。しかし馬具の一部は、東京国立博物館に所蔵されているが、ほかは所在不明である。神福神社古墳の西北約一千メートルには、江南市小折の前方後円墳、富士塚古墳がある。二子山古墳も富士塚古墳も前方部が破壊されているが、富士塚古墳から

の出土品はみられず、周辺から須恵器片や埴輪片が発見されているにすぎない。

この三基の前方後円墳は、約一千メートルの範囲内に三角形に分布し、その間にはかつて十数基の円墳があつたと伝えられている。富士塚古墳は前方部を東にとつているが、二子山古墳と神福神社古墳は前方部を西に向けている。

これらは、自然灌漑による帯状の低湿な水田地帯と、人工灌漑による広大な水田地帯を控えた地点で、当時の生活舞台となつた地域と考えられ、相当の権力をもつた豪族の存在がうかがわれよう。

### 白木古墳

豊田字白木に現存する円墳で、東西の径約十二メートル、南北の径約十メートル、高さ約二メートルで、墳頂に数基の石塔があつたが、昭和五四年ごろ一部が削平され形状が変わつてしまつた。古墳の西側は

低湿な水田地帯で、付近には弥生時代後期から古墳時代へかけての遺跡があつた。

て、古墳への関連性が推察される。

### 小口地区の古墳

#### 新田古墳

大口中学校の北東約二百五十メートルの段丘上に立地し、わずかな封土を残すのみである。いつごろか不明であるが、土取り中に直刀や埴輪、勾玉などが出土したと伝えられているが、地主の酒井史郎氏宅に鉄鏃と勾玉、管玉が保存されている。土取り時には、石室はなかったといわれ、木棺直葬の中期古墳と考えられる。この古墳の南に古墳と考えられる封土をもった半壊の小山がある。

#### 白山古墳群

小口字仁所野の白山神社境内に七基の古墳がある。そのうち最南端にあるのが前方後方墳（久永春男氏 教示）の第一号墳で墳丘上に白山社が祭られている。古墳の東側と北側は、全面に石垣がめぐらされており、西側は雑木林となっている。

現存する古墳の全長は四十九メートル、前方部の長さ十六・五メートル、幅十八メートル、高さ一・六メートルで拝殿と神馬の像がある。後方は長さ三十二・五メートル、幅二十五・三メートル、高さ四・一メートルで二段に築かれた上に本殿がある。後方の封土中に条痕文土器片がよくみられる。そして前方後円墳か前方後方墳かは説のわかれるところであるが、前方部の西側の裾は広がりず長方形であり、後方の裾にも丸味がまったくない。また括れ部の角度も直角に近い状況であることなど、前方後方墳の可能性が強い。前方後方墳は、県内でも数が少なく、尾張最古の古墳である犬山市白山平東之宮古墳と白山第〇号古墳の二基のみである。

第二号墳は、一号墳の北約十五メートルにあつて、高さ約一メートル、径九メートルの円墳である。二号墳の北十

まま今日に至っている。

### 城山古墳

大口北小学校の西南に隣接した小口城址で、通称城山ともいわれた。ここは、巨岩によって石室が築かれており、中からは、須恵器、勾玉、鏡等が出土したと伝えられているが、これが事実とすれば小口城は古墳を利用して、織田遠江守広近が城を築いたと考えられる。城址からは、須恵器片や土師器片が採集されている。



図2-40 白山第5号墳

メートルには、二号墳とほぼ同じ規模の第三号墳があり、墳頂に小さい祠が祭られている。第四号墳は、三号墳の北側にあつて、直径七メートルほどの大きさで封土はほとんど流出し、わずかに盛り上がっているにすぎない。第五号墳は、白山神社の奥まった林の中にあつて、直径約二十メートル、高さ約二・五メートルほどの円墳である。昭和のはじめごろには、墳丘上に愛岩社があり南側には小さい拝殿があつたといわれる。古墳の上部は、径七メートルほどの円形に削平されて、金比羅権現の社が建ち南斜面に切石の階段がある。第六号墳は、五号墳の東南約三十メートルの竹藪の中にある直径約十メートル、高さ約五センチメートル程度の封土が残り、中央に発掘抗がある。その東よりに一枚の岩が露出しているが、むかし、この土を取ったとき、石室が現われたというところで、人々は石室が由緒あるものと考えて祟りを恐れるあまり、再び土で覆い供養したという。その後、再び土取りをしたところ岩が出てその

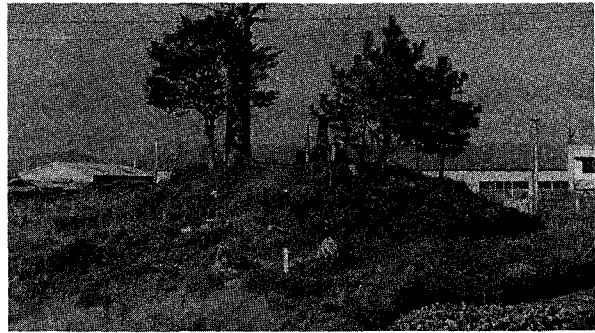


図2-41 善光寺塚古墳

善光寺塚古墳

上小口の北端で、丹羽消防署の東にある。古墳は裾が方形状に削られているため、上円下方墳を思わせるが円墳である。墳丘の南と西の裾は原形を大きく損っている。東面と北面は、二段に築かれた様子が明瞭である。東西の径約二十七メートル、南北の径約二十八メートル、高さ三・七メートルで墳丘上に老木が一本そびえ、かたわらに碑が建っている。またこの古墳の南約二十メートルには墓地があり、その中央付近が周囲よりも高いことから、古い記録にみられた古墳かも知れない。

外坪地区の古墳

石亀塚古墳

外坪字巾上に所在した大きな円墳であった。明治末に道路新設工事によって破壊された。その折、銅鏡、直刀、短甲、須恵器などが出土したといわれるが、現存するのは銅鏡一面のみである。

鏡径十三・三センチメートル、鈕高一センチメートル、鈕座の径二・二センチメートル、縁の厚さ三ミリメートル、面反り三ミリメートルの大きさを全体に磨耗がみられる。

背面は外側から幅の広い平縁、外向鋸歯文帯、複線波文帯、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯の順で円孔帯がある。内区は六個の円座乳を配置し、その間に神像、獸、神像、神像、獸の順で鑄出し鈕をもった四神二獸鏡である。



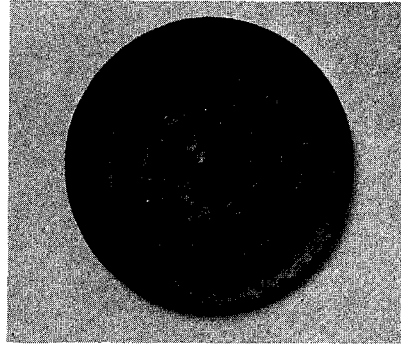


図2-42 石亀塚出土の四神二獸鏡

この鏡は、日本で作られた仿製鏡であり、これを所持した古墳の主は、青塚古墳に關係ある有力な人であったと考えられる。

#### 古墳時代の住居址と遺物

##### 白木遺跡

豊田字白木にある古墳時代の遺跡である。遺跡は周囲の水田との比高が約一メートルで、南北に長い島畑となっており、西側は五条川が南流して江南市と境を分けている。

豊田の圃場整理の工事によって遺物が露出し散乱していたのが、調査の端緒となり、昭和四七年二月緊急調査がなされた。発見された遺構は、住居址二戸、炉址四か所、溝状の遺構などである。第一号住居址は、遺跡の最北端に位置しよく遺存していた。住居址は方形で一辺の長さが六メートルで、四本の柱をそれぞれ二メートルの間隔で配置し、北側の周堤中央に一辺が九十センチメートルの方形のカマドを設けたものである。住居址の中央は盛り上がり、周堤に近づくほど低くなっていた。住居址内の遺物の発見状態は、北東の隅からかまどにかけて、土師器の壺形土器が置かれ、東側の周堤にそって大型の土師器である壺形土器が二個体並んでいたが、ブルドーザーによって上胸部から削り取られてしまっていた。カマドには、炭や灰が充満し、中に壺形土器が破碎されて検出された。そのほか須恵器の杯身、杯蓋、高杯等十点余りが点在していた。この住居址の東側には、炉址が二か所と、南へ約十メートルの地点に第二号住居址が発見された。このほか、住居址の床面と考えられる場所が各所に点



図2-43 白木遺跡の第1号住居址

在していたが、攪乱がひどく原状を把握し得なかった。この遺跡は、古墳時代第四型式の時期を中心にして奈良、平安時代まで続いた歴代遺跡である。付近には白木古墳をはじめ、三基の前方後円墳を結ぶ三角形の中にはいり、周辺の古墳群とのかかわりあいを持っていると推察される。この遺跡の出土品の中には、「人」という文字をへらでかいた杯身の底があるが、小牧市桃花台古窯址群の中の篠岡第六十六号室の出土品にも「人」というへらがきの須恵器が出土しているなど両者の関連性に注目されよう。

#### 西郷前遺跡

秋田字西郷前に所在する古墳時代の遺跡で、替地部落の南西から小牧市に至る自然堤防州の西縁に立地している。遺跡の西側は、北東から南西にかけて低湿な水田地帯が長く続き、遺跡と水田との間には矢戸川が流れている。昭和四〇年この矢戸川の改修工事によって、古墳時代の住居址の一部が発見された。踏み固められた床面に直径約四十七センチメートル、深さ約三十三センチメートルの穴を掘り凹めて、人頭大の川原石を据え置いたもので、中に灰と土師器の破片がつまっていた。炉址付近の床面からは、高杯や杯が数点出土した。高杯は器高九・六センチメートル、杯の口径九・八センチメートルで古墳時代須恵器の第二型式に比定される比較的古い要素をもったものである。そのほかの須恵器片もほぼ同じ時期のものであった。

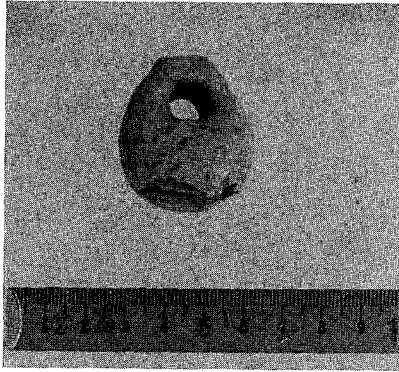


図2-44 清水遺跡出土の土製の鈴

この付近で採集される遺物は、弥生後期末から須恵器の第四型式までであることから、稲作を中心とするムラの存在が想定されるが、耕土の直下に遺構があるために、その大部分が破壊されて部分的に残っているにすぎない。

#### 浅畑遺跡

余野字浅畑所在の遺跡である。遺跡は徳林寺の西北にある微高地の畑で、前面と東側に低い水田面を控えた立地である。付近は洪水による砂質の土壌でその堆積の下に遺物包含層がみられる。ここからは、類例の少ない飾把手付杯が出土した。器高七・七センチメートル、口径十一・八センチメートル、コーヒーカーップの把手に似た把手をつけ、その上に直径一センチメートルの円塊をつけており、杯の胴腹に細い波文を描いたもので、上半は水びきでていねいに成形を施し、下半はへら削りの痕跡を底している。内部は自然釉が全面に付着し胎土、焼成も良好である。この須恵器は古墳時代須恵器の中でも古式の部類にはいるものである。

#### 萬願寺遺跡

小口字萬願寺にあつたが、遺跡の範囲や遺物の出土状況は明確でない。出土した須恵器は、古式の第一型式の杯身や第四型式とみられる宮蓋、壺などで住居址か古墳があつたと推定される。

#### 土製の鈴と犬

土製の鈴は余野字清水の古墳時代の住居址から土師器とともに出土した。出土層位は第三層の灰色を呈した砂質土で床面直上である。全高三・七センチメートル、幅三・四センチメートル、幅二・八センチメートルで孔径一センチメートル、底部の長方形の孔は六×二・四センチメートルで中空となり、中に直径五ミリメートルの円球を入れている。全体に胎土は緻密で乳白色を呈し、焼成は中程度である。音色はや

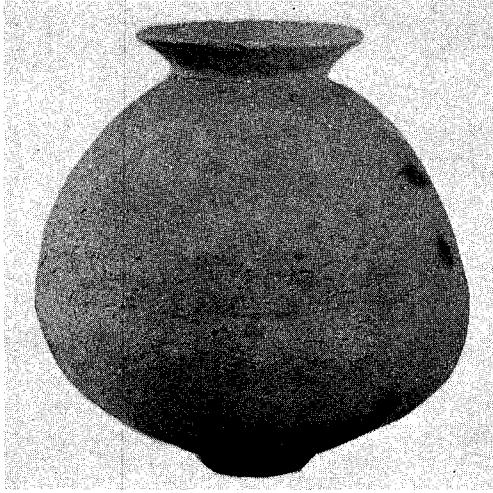


図2-46 清水遺跡出土の壺形土器

や鈍重な反響音を出す。この種の鈴は大山市上野遺跡、扶桑町高木遺跡など  
 三点の出土例がある。用途については祭祀用の可能性が強い。

土製の犬は小口字地蔵堂遺跡からの出土である。形態は前足と後足を欠失  
 しているが、四足をふんばり、首をあげ半身になって振りかえるような体勢  
 を表現している。頭部に耳のあとがわずかなふくらみをもっており、口をわ  
 ずかにあけ全体に写実体で滑らかに仕上げられている。欠損した脚部をのぞ

くと残存部の高さ二・七  
 センチメートル、胴長三  
 センチメートル、胴幅二  
 ・五センチメートルを測る。胎土は緻密で精選されており焼成が  
 よい。

出土地点は縄文早期の押型文土器を出土する位置から十メート  
 ル程離れた所で、古墳時代の須恵器や土師器を主とする散布地で  
 あり、芋の貯蔵穴が掘られた際、須恵器や土師器とともに出土し  
 たものである。

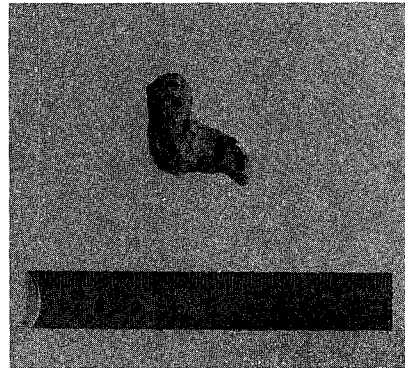


図2-45 地蔵堂出土の土製犬

## 第4節 古墳時代

表2-4 大口町古墳地名表

番号	名 称	所 在 地	外 形	出土遺物と内部構造	その他
1	桜塚古墳	大口町秋田字柳原33	円 墳	石室、川石積	現 存
2	同(道)心塚古墳	〃 秋田字北替地24	〃	石室の中は朱塗り	〃
3	しょねん塚古墳	〃 大屋敷字向野47	〃	川石積の横穴式石室	〃
4	大日塚古墳	〃 大屋敷字勝負池47-2	〃		〃
5	白木古墳	〃 豊田字白木75	〃		〃
6	神福神社古墳	〃 豊田字福田65	前方後円墳	須恵器片	
7	善光寺墳古墳	〃 小口字郷西32	円 墳		〃
8	白山第1号墳	〃 小口白山神社境内	前方後方墳		〃
9	白山第2号墳	〃	円 墳		〃
10	白山第3号墳	〃	〃		〃
11	白山第4号墳	〃	〃		〃
12	白山第5号墳	〃	〃		〃
13	白山第6号墳	〃	〃		〃
14	白山第7号墳	〃	〃		半 壊
15	秋 葉 塚	〃 豊田秋葉社内	〃	土師器片	現 存
16	八 剣 社	〃 豊田八剣社内	〃		〃
17	巾 上 古 墳	〃 外坪字巾上	〃		〃
18	三 明 神	〃 大屋敷	〃		〃
19	小口城址古墳	〃 小口字城屋敷	不 明	鏡、須恵器、玉、刀	〃
20	仏 鬼 塚 古 墳	〃 秋田字西藪山18	円 墳		消 滅
21	大塚第1号墳	〃 大屋敷大塚34	〃	円筒埴輪片	〃
22	大塚第2号墳	〃 大屋敷大塚25~26	〃		〃
23	大塚第3号墳	〃 大屋敷大塚12	〃		〃
24	山 王 道 古 墳	〃 大屋敷山王道	〃	須恵器片	〃
25	白 亀 塚 古 墳	〃 豊田字白亀82	〃	須恵器片、鉄器	〃
26	東 屋 敷 古 墳	〃 豊田字東屋敷17	〃	横穴式石室、須恵器	〃
27	岩 木 塚 古 墳	〃 豊田字西成兼41~42	〃	横穴式石室、鏡、須恵器	〃
28	霞 野 塚 古 墳	〃 豊田字霞野24	〃		〃
29	西成兼塚古墳	〃 豊田字西成兼25	〃		〃
30	度々目利塚古墳	〃 豊田字度々目利90	〃		〃
31	若 森 塚 古 墳	〃 豊田字若森52	〃		〃
32	丸 山 塚 古 墳	〃 豊田字巾上	〃		〃
33	新田第1号墳	〃 小口字新田	〃	木棺直葬、刀、玉	半 壊
34	弁 天 東 古 墳	〃 小口字弁天東23	〃		消 滅
35	東 樋 田 古 墳	〃 小口字東樋田	〃		〃
36	田 中 古 墳	〃 小口字田中	〃		〃
37	上 向 又 古 墳	〃 小口字上向又	〃	棺、玉、馬具	東京国立 博物館蔵
38	新田第2号墳	〃 小口字新田	〃		半 壊
39	西 郷 前 古 墳	〃 秋田字西郷前	〃	須恵器片	消 滅
40	石 亀 塚 古 墳	〃 外坪字巾上	〃	鏡、刀	〃

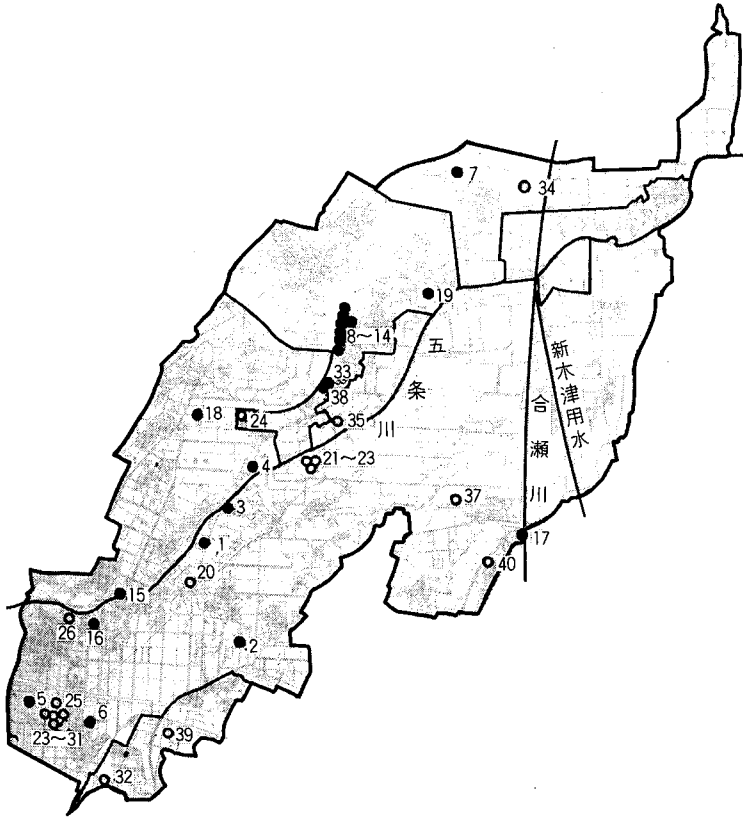


図2-47 大口町古墳分布図